くらしの中で読む『正法眼蔵』

――面授の巻――　その八

成興寺住職　小倉玄照

〈本文〉

いはゆる、わがくには他国よりもすぐれ、わが道はひとり無上なり。他方にはわれらがごとくならざるともがらおほかり。わがくに、わが道の無上独尊なるといふは、霊山の衆会あまねく十方に化導すといへども、少林の正嫡まさしく震旦の教主なり、曹谿の児孫、いまに面授せり。このとき、これ仏法あらたに入泥入水の好時節なり。このとき証果せずば、いづれのときか証果せん。このとき断惑せずば、いづれのときか断惑せん。このとき作仏ならざらんは、いづれのときか作仏ならん。このとき坐仏ならざらんは、いづれのときか行仏ならん。審細の功夫なるべし。

〈現代語私訳〉

世俗では、わが国は他国よりもすぐれているとよく言うが、私が伝えた仏道だけがひとり最高最上のものなのである。まわりの状況をみてみるとわれわれのようには、やらない連中が多

いようだ。わが国の、私が正しく伝えた仏道が最高最上でそれのみが尊いというのには（理由がある。）たしかに釈尊は、霊鷲山の道場で法を説き数えきれない多くの人々を教え導いたのであるが、そのいのちの神髄を正しく受け継いで来たのは達磨であり、少林寺の道場で中国の初祖として慧可に正しくそのいのちを伝えたのである。それは伝え伝えられて曹谿恵能に至り、さらにその弟子から孫々（そんそん）にいのちを面授し、今、わたし道元に至っているのである。この時こそ、まさに仏法が世俗の中に深く浸透し広まっていくよき時節である。この際、自然の摂理に添いきって修行することがそのままさとりであるということを示さなければいつそれができるのか。この際、横着本性の肥大を断ち切らなければ、いつそれができるのか。この際、背筋を伸ばして自然の摂理に添いきる生活をしなければいつそれができるのか。この際、只管に坐禅しなければ、いつ自然の摂理に添いきった生き方ができるのか。よくよく徹底して功夫をしてみるべきである。

正伝の仏法こそ最上

この段は、読みとりがむずかしい。特に、冒頭のセンテンスは、理づめには中々読みきれず、大いにとまどいを覚えます。

世間一般で言われている我が国は他国よりもすぐれているということと、自分が伝えた仏道だけが特に最高最上であるということとは、日本語の文法の常識からすれば、順接の関係になるのです。ところが、それではどうにも意味がすっきりしません。私は、あえて逆接の関係と受けとめて現代語訳してみましたが、順接にこだわれば次のような意味になりましょうか。

「世俗では、わが国は他国よりもすぐれてい

るという、とりわけ私が伝えた仏道は特に最高最上なのである」

こういう順接的な受けとり方を私があえてとらなかったのは、道元禅師は、日本の国については、決して「他国よりもすぐれ」ているとは思っておられなかったふしがあるからです。例えば、『正法眼蔵』行持（下）の巻には、わが国のことについて、

「われらが卑賤、おもひやれば驚怖しつべし、中土をみず、中華にうまれず、聖をしらず、賢をみず、天上にのぼれる人いまだなし、人心ひとへにおろかなり」

と述べておられます。あえて現代語訳する必要もありますまい。わが国は、辺地だから考え方もいやしく劣っている、と嘆いておられるのです。

こういうお言葉からすれば、当然、私の現代語訳のような受けとめ方になるはずでしょう。世間一般では、わが国は他国よりもすぐれているというが、あながちにそうでもあるまい。私が伝えた仏道だけがひとり最高最上のものなのだ、と言うておられるのです。

そして、如浄禅師から親しく伝えられた仏道が、なぜ最高最上のものであるのか、といういわく因縁を簡潔に説き示しておられるわけです。それは、釈尊から代々面授面受によって正しく受け伝えて来たがゆえにひとり最高最上の仏道なのだと強調されている点を私たちは軽く見過ごしてはならないのです。

豊かさが自我肥大を生む

自分が伝えた仏道だけが最高最上で、他の連中の仏道は似而非くさい、という言い方は見方によれば、鼻持ちならない自尊心の強さと映るかもしれません。しかし、考えてみますと、（も

ちろん伝説ですが）釈尊がご生誕の直後に発せられた言葉として、

「天上天下唯我独尊（天上天下、ただ我れ独り尊し）」

が伝えられ人口に膾炙しています。自尊心は、人間の生きていくための原点だと考えるのが、仏教の伝統だということを示すエピソードのように私には思えます。心理学でいう「自我」もある意味では、「唯我独尊」と根っこを同じにしていると言えるのかもしれません。

もっとも、現代人一般に自我肥大の傾向がみえるのは気になります。誰もがテレビ等で仕入れた情報をもとにして評論家気どりで「唯我独尊」ぶりを発揮しているような点です。これは決して賞められた傾向とは言えません。まずもって自分を客観視する、という姿勢が欠けているように思えるからです。

先年『東大生はバカになったか』といういささか刺激的な立花隆氏の著作のことが気になっていましたら、すかさず『週刊朝日』平成十三年十一月二十三日号が「東大卒は職場のお荷物か」という巻頭特集を組んでいました。「小利口なコマッタちゃん増殖」というコピーにつられて私も購読してみました。

「東大」という具体的名称をあげてことを論じている点にいささかの抵抗を覚えました。しかし、それをいわゆる現代の偏差値競争に勝ち上がった者の象徴と考えたら、そういう問題を論じてみる価値があるのかもしれません。おそらく生活体験の欠如した受験専念世代の勝者の尊大な自我肥大の傾向を問題にした特集だろうとは予測がつきました。一読して私の見当は、おおむね外れてはいませんでした。

「結局、昔ほどの学力がないのに、〈オレが世界だ〉という体質だけが身についた、出来の悪い東大卒ほどやっかいなものはない、というこ

とかもしれない」（大波綾記者）

ここでいう学力は、生活体験も豊かで応用力のある総合的学力という意味なのでしょう。

特集中での立花隆氏のコメント。

「東大法学部の連中はこぞって愛校心が強い。彼らに東大卒に教養がないことを指摘すると〈自分を除いて教養がない〉と考える。僕は本の中で法学部を辛辣に批判したが、法学部卒の人が読んでも〈自分以外の話〉だから、怒りはしないだろう。」

尊大な自我肥大が極まるとコマッタちゃんになってしまう――ということでしょう。しかし、これは何も東大卒に限った話ではありますまい。総じて現代人、特に生活体験の乏しい人ほどその傾向が強いように思われます。

その原因は、文明が極度に発達して、手作業や肉体労働を殆どしなくてもよいようになったことに求められます。スイッチやボタンを押せば、テレビやインターネットで誰でもが簡単に情報を入手できます。苦労して難解な書物を読み込まなくていいのです。お金さえ払えば、何でも入手できます。台所にまな板がなくても、毎日、山海の珍味を食することも可能です。夜業で手袋を編む母さんも殆どいません。銭を払えば、美しく立派な手袋が安価に入手できるのです。

生産や知識の取得に苦労がなくなれば、当然の帰結として人々は謙虚さを失います。自分の力で何でもできたと錯覚してしまうのです。太平洋戦争の前後に幼少年期を過ごし、厳しい自給自足の生活を強いられた体験のある私たちの世代ですら、いつのまにかそうなってしまっているのです。ましてや豊かで便利至極な社会で誕生し成長した若い世代になれば、自我肥大が極まって尊大になっても不思議はありません。

私淑する師を持つ

それにしても、現代人の自我肥大による尊大さと、道元禅師が「わが道はひとり無上なり」と断言されるときの「無上独尊」とは、文明の発達による生活の利便さがもたらしているだけのものとも言えないようです。もっと根本的な質的差異があると考えなければなりません。それを明らかにしているのがこの段の眼目と申してよいでしょう。

それを今流に平たく言えば、人間の正しい生き方を求めて努力している人を自分の人生の師として持っているかどうかが問題になると言っておられるのです。道元禅師が「無上独尊」を自負されるのは、如浄禅師という「無上独尊」の正師を師としてその生き方を慕いつつ生きておられるからです。如浄禅師はまた雪竇智鑑（せっちょうちかん）という正師の下でその生き方を全面的に尊崇するという人生を送られたのです。

独尊を自負する生き方は、師が独尊であって初めて可能なのです。それゆえに、師にはその師の独尊の由緒があるはずで、雪竇智鑑の師をさらに遡（さかのぼ）れば、達磨大師に至り、それをさらに遡及（そきゅう）すれば、釈尊に至るわけです。しかも、その尊崇する師は、歴史上の時間を超越して、直接に釈尊であるというのでは駄目なのです。釈尊のいのちを生身のからだで伝えつたえて、自分の眼前に生きている人でなければならないのです。

禅門では「煖皮肉（だんぴにく）」ということを強調します。温かい血の通っている肉体のことです。釈尊のいのちが煖皮肉として息づいている師について修行したかどうか――それがきわめて重要なのです。

もちろん、無常の世ですから、ある段階でそ

の師は亡くなってしまうかもしれません。しかし、既に幽冥界を異にしても、尊崇する師の生きざまが眼前に彷彿とし、生きている人に対するが如くその真影に礼拝が行ぜられなければならないのです。

道元禅師は、いわゆる「弘法救生」を願いとして京洛の興聖寺で教線を張られました。しかし、やがてその活動に行きづまりを感じて苦悩を深められたようです。その時、思いを寄せられたのは、今は亡き如浄禅師でした。亡き師に指針を求められたのです。そして、如浄禅師の祥月命日である寛元元年七月十七日を期して京洛の地を離れ、越前の深山幽谷に修行の拠点を移すことを決行されました。

件の『週刊朝日』の記事における尊大な自我肥大が困った問題となるのは、結局、自分が私淑する師を持っていないからなのです。現代人一般の、自我肥大の傾向についても、やはり同質の問題が考えられないでしょうか。

テレビとかインターネットでさまざまな情報を安直に得ることができるのは決して人間のためによいことではないのです。単なる知識は、それがいくら沢山収得されても、この世を生きて行く力とはならないのです。私淑する人生の師は、そこからは決して得られないからです。

人生を生きて行くときに一番大切なものは何か。それは知識の多寡とは関係ありません。つまるところ、人生を真剣に生き抜こうと努めている人の煖皮肉にふれて感動することなのです。そしてその人に全面的に私淑して生きようと志すことなのです。

今、日本の教育に一番欠けているのは、その問題なのです。

楊淡善光寺
沙門
三尤庵